奈良今昔写真 WEB 蔵

東大寺　南大門　金剛力士像

昭和 39 年（1964）夏

手前は仏教美術写真の売店

厚見昌彦氏撮影

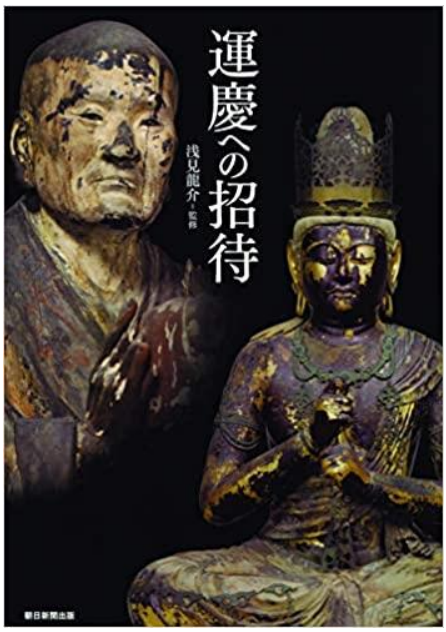
朝日新聞社出版

『運慶への招待』

浅見龍介＝監修

当館資料 ID111313002

平成 29 年（2017）9 月 20 日発行



朝日新聞社出版

浅見龍介＝監修

「運慶への招待」20 ページ

ONE and ONLY

仏師でありアーティスト運慶

Why is UNKEI a "superstar"?

運慶は、なぜ「スーパースター」なのか？

浅見龍介＝語り

構成＝編集部

運慶を語る上で、必ず並び称されるのが、同時代の仏師・快慶です。快慶も素晴らしい仏師ですが、運慶は、快慶とは根本的に異なる彫刻家だったと思います。

二人とも性格や人柄を伝える資料はなく、詳細はわかりませんが、残された仏像から、快慶の造像は、極楽に往生するための作善だったと考えられます。快慶は、丸阿弥陀仏と称する阿弥陀信仰者でした。快慶の仏像は、安阿弥様と呼ばれる三尺（像高約90センチ）の阿弥陀如来立像が多く、定形化しています。

しかし、運慶には、定形化ということがほとんどない。注文主の依頼を受けながらも、個性を打ち出し、一体一体の仏像を「唯一無二」「自分の作品を造る」という意識で新しい造形を求めたのでしょう。

現代の日本ではIT技術やアニメが象徴的ですが、社会のエネルギーが注ぎ込まれるところには、ものすごい才能が生まれます。それは人々の関心や資金がそこに集中するからです。運慶の時代には、寺や仏像にそれらが注がれていました。仏師もたくさんおり、裾野が大変に広い。そのなかで運慶は、つねに独創的なものに挑戦しながら、自分を作家と位置づけて頂点に立った初めての彫刻家、といっても過言ではありません。

これぞ運慶！1

ほかの仏師が真似できない「唯一無二」の仏像を造った

昭和39（1964）年
夏の東大寺南大門

レジャーブームが起きた昭和30～40年、誰でも見ることができる東大寺南大門の『金剛力士立像』は、運慶仏の代表として、多くの人の記憶に焼き付いたことだろう。

撮影／厚見昌彦、画像提供／奈良県立図書情報館

20